

万緑に浸り切つたる熟寝かな
 玄関を守る父の下駄梅雨に入る
 人形町路地小暗きに走り梅雨
 青しぐれ荒汐部屋に軒を借る
 蝸牛往く電磁波を掻き分けて
 光らねば己が消ゆる夜光虫
 十葉の奔放に科無かりけり

汗の肌

汗は気温が高い時に出る。酷暑には黙って座っていても出るが、まして運動などをしようものなら噴き出るといふ表現が適当であろう。ただ汗には体温調節という役目もあると、このことで嫌ってばかりもいられないが、登四郎先生の「汗の肌より汗噴きて退路なし」という御句の「退路なし」に注目すれば、尋常ならざる汗となる。

掲句は沖創立後に出版された第四句集の『民話』に所収されているが、第三句集の『枯野の沖』の「あとがき」には、「この句集は私が俳句という詩型に無限の可能性を信じようとしたり又絶望したりさまざまな試行錯誤を重ねた混沌時代に生まれたもの」とあり、「伝統詩型と闘って傷だらけになった」とある。つまり先生の汗は俳句という詩型ととことん闘った精神的緊張に因るものなのである。何と貴重な汗である。こうした汗の一滴も持ち得ることなく、冷や汗を拭う我が身を反省するばかりである。